

# 私立 星槎大学

## プログラムの名称

SNSを利用した通信制大学での修学支援  
——個々に応じた学習支援と学生ネットワーク構築の定着を図る

## プログラム担当者

共生科学部 専任講師 西永 堅

## キーワード

1. 通信制大学 2. 幅広い年齢層 3. 幅広い社会的立場  
4. 全国各地に居住 5. インターネット

## 1. 大学の概要

星槎大学は2004(平成16)年4月に開学した、収容定員2,000名の通信制のみの課程を持つ大学である。

本学を北海道芦別市におき、その校舎は登録有形文化財にも指定されている総レンガ造りであり(末尾写真参照)、体育館は木造トラス構造のもので(写真1)、同じく登録有形文化財に指定されている。

学部学科の構成は、共生科学部共生科学科の1学部1学科であり、教職課程をはじめとして、社会福祉士受験資格など多くの資格関連科目を開講するとともに、生涯学習の場としても機能できるような科目を含め、全161科目開講している。

本学共生科学部共生科学科は、専門領域として「教育」「福祉」「環境」「国際関係」を持ち、各領域を横断的に学んでいけるカリキュラム構成であるとともに、ボランティア活動やインターンシップ、課題研究/共生実習などの課題探求分野科目も横断的専門領域として開講している。

現在在籍している学生は2,123名であり、平均年齢34.8歳、全国45都道府県と、海外2カ国に在住している。学生の6割はフルタイムの仕事をしている社会人学生である。



写真1 木造トラス構造体育館

## 2. 本プログラムの概要

本プログラムは通信制大学における学びにくさを、学生指導組織とネット社会の融合を促進していくことによって解消していくものである。そのために、在籍する幅広い年齢層の学生同士の交流や、幅広い社会的立場の学生同士の交流、また全国各地に居住する学生のインターネット上の交流を促進し、脱自学自習を目指すものである。

具体的には、本学ですでに各教員ページとして設置されているSNS機能を拡充して、インターネット上の学生相談・支援体制の充実を目指すものであり、本学の学生指導組織であるマンツーマン指導員を基礎とした、SNS(ソーシャルネットワーキングサイト)でのコミュニケーションの円滑化と、学習課題の共有化、科目情報の共有化を更に図り、時間や空間の制約を乗り越えた通信制大学ならではのコミュニケーションの促進に資するものである。その仕組みを積極的に活用できるようにし、学習を継続することの意識付けと、新たな学びへの意欲を喚起していくことも行う。

## 3. 本プログラムの趣旨・目的

Eラーニングプログラム等の陥りがちなシステム優先ゆえの学びにくさを、学生指導組織の積極的関与と学生同士の交流によって学びやすさに変えていくとともに、通信制大学の現状である自学自習による学びにくさを克服していくことを目的とする。

現在本学では教職員一体となって、学生支援・学習支援に当たっているが、現在の方法で(図1)24時間365日にわたり、様々な立場の学生を支援していくことは困難であり、通信制大学に求められている社会的ニーズに十分に答えられない。社会人学生の多様な生活リズムへの対応、生涯学習として学ぶ方への支援、ニート等学生への支援、どれも通信制大学だからこそできることであると考えている。

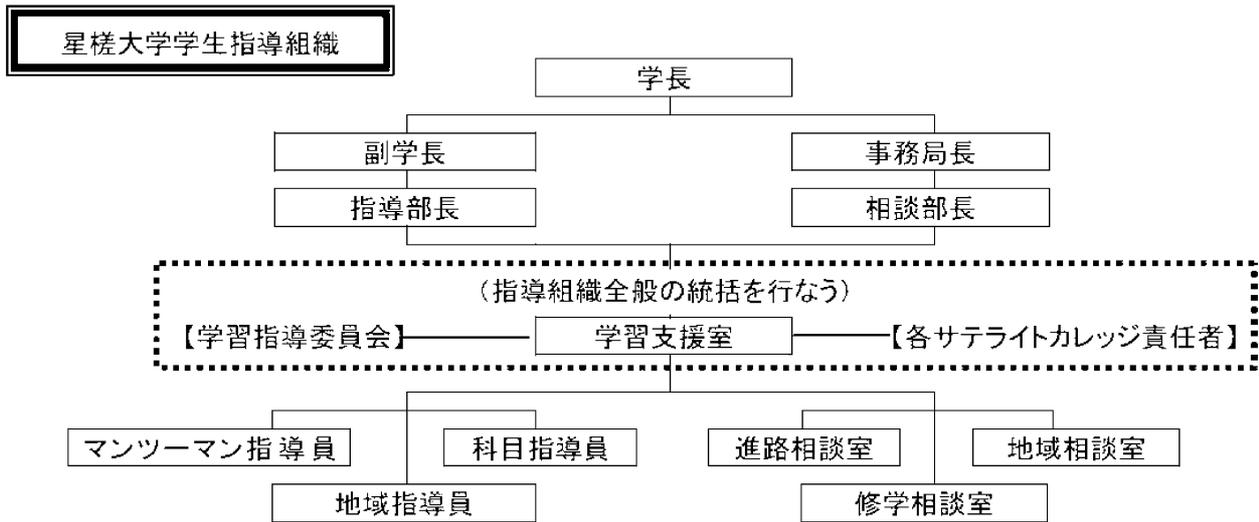


図1 星槎大学学生指導組織

学びを支援し、学びを保証し、更なる学びを喚起することの実現が、本学のみならず大学の持つ社会的意義と認識している。

#### 4. 本プログラムの独自性(工夫されている内容)

現時点での学生支援に向けた大きな課題である、幅広い年齢層の学生、幅広い社会的立場の学生(様々な生活リズム)、全国各地に居住する学生のニーズに応えるために、SNSの仕組みを十分に活用できれば、現存する課題の解決が以下のように向かうと考えている。

- (1) 時間の制約に捉われない学習と大学内でのコミュニケーションが進む。
- (2) 学生にとって必要な情報が簡単にいつでも取得できる。
- (3) 学生個人の悩みや課題が共通の認識として共有、解決できる。
- (4) 課題を共有し解決することで、学びを深め、新たな知を創造することができる。

現在運用しているSNSの機能と内容は以下のものである。

- ブログ機能 (学生と教員のコミュニティ)
- SNSのフォーラム機能 (24時間質問受付)
- 教職員のみコミュニティサイト (学生の履修状況等の管理)

新たな取組としてSNSに以下の機能を加え、学生支援に資することを計画している。(図2)

- カテゴリ別QAの自動送信機能

個別のコミュニティ (ex.地域別、科目別) 毎のメ

ニューにより共有すべき情報の展開を適切に行えるようにする。

- レポート提出、添削ワークフロー管理機能  
レポート提出～添削までのやりとりをワークフロー化しフローの迅速化、可視化を実現し学生の学習意欲を高める。

- 履修科目レビュー機能  
修学目的に合わせた履修科目の情報提供及びその科目をすでに履修された学生からのレビューを配信し学生の修学意欲をかき立てる。

- 学生アンケート集約機能  
学生からのアンケートを収集し、その結果を速やかにFDに生かす。

また、単に機能を追加しただけでは学習への効果は小さい。多くの学生が利用してこそ、本来の意味をなす。ゆえに、多くの学生が実際に利用できるように以下の取組をする。

- 利用マニュアルの作成  
冊子形式のみならず、説明をストリーミング配信できるように作成する。

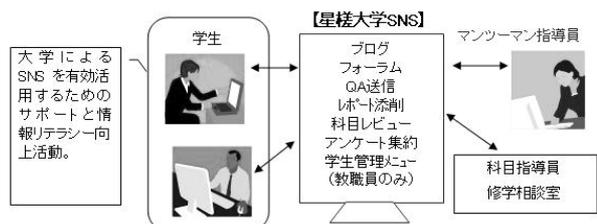


図2 SNSイメージ

### ●定期的な利用方法等の説明会の開催

全国にある学習センターやスクーリング会場を利用して、隔月利用説明会を行う。

この説明会はテレビ会議システムを利用し実施する。また、合わせて情報リテラシー向上活動も行う。

本学がSNSの仕組みを用いて取組む学生支援と、その活用を促し学習効果を向上させる取組は通信制大学ではもとより、通学制大学においても、学生支援に大いに資するものであると考えている。

## 5. 本プログラムの有効性（効果）

### (1) SNS機能強化によって学習支援室活動の指導力向上への効果

24時間365日の支援が可能になることが、最も有効な学生支援になると思われる。それゆえに、基本機能の拡充が必要である。

また、現在運用しているSNS機能を強化することで学生の声が大学によりスピーディーに反映させ、各種アンケートにおけるニーズ把握におけるタイムラグと、学生支援の行動までのタイムラグは大きく短縮され改善されることが期待される。その結果、学習意欲を沸き立たせ、24時間365日の学生支援により近づいていけると考えている。

### (2) 情報リテラシー向上効果

SNS機能利用者を増やしていくための説明会において、情報リテラシー向上活動を全国で実施していくことで、学生の情報スキルのみならず、情報に関する倫理感の向上も期待できる。また、本学学生は社会人である成人学生が多くを占めることから、その家庭内へ波及効果も期待できる。

### (3) 誰でも、いつでも、どこでも、学べる大学にするために

今後、通信制大学には社会人からリカレント教育のニーズ、これから進展していくであろう生涯学習の観点からのニーズ、そしてニート等対策としてのニーズが考えられる。

また、本学共生科学部には、これからの共生社会について学びたい方、各種資格取得を求める方等、多くの方の入学が予想される。

それらの方々の学習を支援し、より社会に貢献できる大学となることが求められている。

それゆえ、通信制大学が今まで学びにくいとされてきたいくつかの原因を、情報化社会の進展による技術の進歩と、通信制を専らとする大学の指導組織により、学びやすいものとしていかなばならないし、SNSは現時点で有効な方法であると考えている。

実際に、総務省の2007(平成19)年度情報通信白書によると、2006(平成18)年のインターネットの人口普及率は68.5%、インターネットの利用人口はおよそ8,754万人(対前年225万人増)と推定される。合わせて、同省が2005(平成17)年5月17日に発表した「ブログ・SNSの現状分析及び将来予測」によると、2007(平成19)年3月でのインターネット利用人口は約7,000万人、そのうちブログ閲覧者数は、約3,455万人、SNS参加者は延べ約1,042万人と予想している。つまり、2005(平成17)年に予想したものより速いペースでインターネットを利用する方が増えたことになる。当然のことながら、ブログやSNS利用者も同様に増加していると考えられる。

これらの現状は、単なるEラーニングとして学習コンテンツに関わる部分の配信・閲覧という取組だけではなく、本学の考える、学生同士、学生と大学教職員などのコミュニケーションネットワークを構築し、通信制大学での学びやすさを実現するための素地が整ってきたということであると判断している。

### (4) SNSが教育活動や研究活動にもたらすもの

学生支援を主眼にしたSNSだが、その効果は教育活動や研究活動にも寄与することが考えられる。SNSの効果は、大学に所属する学生・教職員が必要な情報を公開し、互いにコミュニケーションをとり支えあい、学習活動に当たることにあるが、自ら参加し、情報を公開するということは、そこから新たなものを生み出す大きな可能性を秘めている。特に通信制大学においては、今まで一対一のクローズした学修の印象が強かったが、学修や研究がオープンになることで、より優れたものを生み出すことが可能になると考えられる。

またそれは、指導をする教員にとっても、学生からの評価を受けやすくなり、教育活動の向上に間違いなく効果があると考えられる。

## 6. 本プログラムの改善・評価

### (1) SNS導入による学生支援効果の評価体制と評価方法

学生支援・学習支援の効果は、現状と同じく自己点

検・評価委員会の学生部会で行う。ただしその評価方法は、現在のような形式のアンケート調査を中心としたものではなく、SNSを中心に行う。

また、学生部会とは別にSNSの特性を持って、1年ではなく最低四半期での学生支援・学習支援の効果を測定し、学習指導委員会にて評価と善後策も考えていく。ただし、学生が100%SNSを利用するわけではないので、当面はその利用状況に合わせて、アンケート用紙による調査も合わせて行っていく。

## (2) SNS導入効果の評価の観点について

その利用数が評価を表すとも取れるが、目的は学生支援・学習支援であるので、学生のレポート提出率、スクーリング参加率、単位修得率がその効果を計る観点となる。合わせて、科目登録の際の登録科目数の増減も学生の学習意欲の変化として評価の観点になる。また、SNSの利用数、使いやすさや、使い方に関するサポートの良し悪しも評価対象となる。

## (3) 評価の活用について

これらの評価は、自己点検・評価として活用するが、評価項目として挙げられたものは、SNSのシステム改善も含め、より学生支援・学習支援に効果が上がるように生かしていく。

# 7. 本プログラムの実現可能性・将来性

## (1) 各年度実施計画

2008(平成20)年度

- ・QA自動送信機能、レポート添削・ワークフロー機能、履修科目レビュー機能、学生アンケート収集機能テストラン
- ・利用マニュアルの作成(冊子及びストーリーミング配信コンテンツ作成)
- ・定期的な利用方法等の説明会を全国10会場で隔月実施

2009(平成21)年度

- ・全機能本格運用開始とともに全機能利用状況点検
- ・定期的な利用方法等の説明会を全国10会場で隔月実施

2010(平成22)年度

- ・全機能のブラッシュアップ
- ・定期的な利用方法等の説明会を全国10会場で隔月実施

2011(平成23)年度

- ・定期的な利用方法等の説明会を全国10会場で隔月実施

## (2) 実施体制

学習支援室の中に「SNS担当室」を設置し実施していく。SNS担当室は、現在の学生指導組織の活動にSNSを有効に利用することを中心に考える。マンツーマン指導員の活動、科目指導員の活動をはじめ、地域指導員、修学支援室、地域相談室、進路指導室、など全指導組織にどのようにSNSを活用できるか、また学生が利用するための工夫なども合わせて考える。

ただし、実際のシステム設計に関してなどは専門業者と協力して開発する。

また、実際の運用に際しては、より効果的にしていくために、

- 迅速な回答を行うための指導員の役割・担当の明確化(担当の曜日当番制)
- フォーラム、コミュニティの定期的な監視体制の確立(責任者の擁立)
- アクセス範囲の設定などの運用方法を確立する必要があることから、事務局員を新規採用し配置する。

## (3) 実施するうえでの課題と対応

以下の課題が想定される。

- SNSのシステムに頼りきりになり、学生のみがSNSに関わり、教育活動や研究活動が停滞する。
- SNSの前提である「参加する意識」「公開する意識」が欠如し利用者が少ない状況。

対応は以下のように考えている。

- 現在の学生指導組織の特徴である、個々の学生への電話・Eメール・FAXや対面等での対応をなくさないで並行して実行すること。
- FDによる教員研修を実施し、SNSの利用に組織として取り組むこと。
- 学生の利用を促すため、全国の学習センターで説明会を実施すること。

いずれにせよ、本学の現在の学生指導組織を基本として、システム頼りにならないような姿勢を維持することが必要である。

## (4) 将来展望と起こり得るであろう課題

「学生のSNSへの参加」と「知のオープン志向」は

確実に進行することが予想される。理由は、全世界的にインターネットの世界で「個人の直接参加」と「オープン志向」は確実に進行しているからである。すでに大学の講義であっても日本でもポッドキャストを使い無料でダウンロードできるものがある。

これらの流れは開かれた知を創造する可能性と、無秩序な世界を構成する危険性がある。特に著作権保護

の問題は知のオープン志向とともに大きな問題となることが予想される。

それゆえ、通信制の大学が直接の学生指導も踏まえながら、SNSを利用して学生支援・学習支援し、その意味や方法を普及させていく意義は、開かれた知を創造し、無秩序なネット世界の構成を回避するためにも大きいと考える。



写真 総レンガ造り校舎

### 選 定 理 由

星槎大学においては、通信制大学という就学形態と、幅広い年齢層の学生が在籍しているといった特質に合わせた学生支援の取組が組織的に行われており、その結果は、単位修得率が60%前後を保っているところから実証されるように、成果が上がっていると言えます。

今回申請のあった「SNSを利用した通信制大学での修学支援」の取組における学生ネットワーク構築は、すでに各教員ページとして設置されているSNS機能を拡充して、インターネット上の学生相談・支援体制の充実を目指すものですが、時間や空間の制約を乗り越えた通信制大学ならではの工夫の見られるコミュニケーション促進の取組であると言えます。

特に、幅広い年代層の学生がSNSを利用してコミュニティを形成することは、情報の共有化に留まらず、ピア・カウンセリングとしての効果など様々な発展性を備えており、他の大学等の参考となる優れた取組であると言えます。